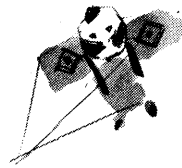


# 一九七三年を迎えて

## ―保育新論―を思う



相 馬 誠 子

幼児教育が、人間の基礎教育であり、最も大切であることは、昔から多くの幼児教育者たちや、それを理解する人々の間で叫ばれてきた。そして今日になって、ようやく社会全般にみとめられるようになったことは、幼い子どもたちにとって、この上ない喜びである。

しかしながら、どういう方法がよいのかということになると、いろいろな考え方があり、親も教育者も、混乱しがちな現状ではないかと思われる。

この時にあたり、私は再び、故倉橋惣三先生の教えをかみしめてみたい気持ちになった。特に日本が民主社会に一八〇度の転換をした時の民主保育についての話である。

あのころ、昭和二十一年の夏、故倉橋先生の講話を聞きたい一心で、身動きもできない夜行列車にゆられながら名古屋から上京して来た私であった。お茶の水の遊戯室にひびく、先生の「保育新論」の一言々が、再び幼児教育者として立ち上がろうとする人々の心にしみ通っていった。以下、それらをここに紹介したいと思う。

### 民主保育とは――

幼児は元来、非民主的な点を一杯もっているが、一方には、人々に親しみをもつ心、人を信じる心、人を敬する心をもっている。これらは、交換条件（信頼すると間違いないから、価値

があるから尊敬する、など）があるからではなく、人間味に対して親しみ、人間だからこれらの気持ちをもつのである。この人間性に対して、人間教育が生まれるのであり、人間教育が保育の目的であり、民主保育なのである。

### 人間教育の三点

- (一) 生きている「生」
- (二) 個において生きている
- (三) 社会的に生きている

(一) 生きているとは

民主生活は実に生き生きしている。そしてそれは、発表、実行の条件をそなえている。単なる人のいったこと、したことのくり返しではなく、独創的なものであることが望ましい。幼児期は、発表的、実行的であるから、これを妨げないようになれば、特別に指導をしなくてもよい。

(二) 個において生きているとは

個々というものを自覚するのは成年期である。幼児期において出る個というものの多くは、自分さえよければというわがままにすぎない。しかし真の個というものもそろそろ出始める。四歳は四歳、五歳は五歳としての真の個を大切に、怠

りなく、注意して育てていかなければならない。

本当に幼児の教育のできる人は、真の個を本当にいかしていく人である。真の個とは自己を尊重し、同時に相手の個を尊重させることである。個の確立しない生活は実に無価値である。ではどんな所に個の確立した生活があるか？

幼児としての実際面を考えると、次のようなことがいえる。

#### 1. 自他の区別をはっきりする

これは、個の発達していく上の実際面である。今までは、自他の区別ということをも、所有権とか、物の整理という意味において論ぜられていたが、民主主義において、自他をはっきりさせるということは、個の発展のためにも重要であり、座席においても、持物においても、はっきりさせることが大切である。

#### 2. 自己に責任をもつ生活をさせる

自発的な生活が行なわれている中でも、責任をもつ、自発である場合に、真の個が育てられていくのである。やりっぱなし、甘ったれは無責任である。やる気になって玩具を出して遊んだあとは、もとの所へ片づける責任がある。またないから片づけるなどという単純なものではない。貴方が出したのだから貴方がしまわなければならないというように責任を

もたせる。

保育者の言葉の使い方により、その意義が根本から異ってくるから、よくよく考え、軽はずみない方は慎まねばならない。

この責任という意味において、民主主義はきびしいのである。だらしない生活は自分の生活に責任のないことである。

### 3. 有難うの気持ちを強調する

民主主義は、意見を主張し、いかにも味のないもののようなであるが、有難うは、民主主義の純粋なものである。

自分ですべきことを人がしてくれたのであるから、個の責任において、確立の上において、感謝の気持ちが起こるのが当然である。

### 4. 人を馬鹿にしない、批判しない

民主的生活においては、同じ人間同志、あなどり、みくびることはよくない。

ここに『つげ口』の問題が、実際面として出てくる。

### ◎『つげ口』に対して、どう処するか

人を批判し、つげ口をすることはよくない。しかし批判と正しい判断とは、またちがう。

例 A子がB子の紙をとったので、B子がつげ口に來たとする。

その場合のA子に対する扱い方に留意したいが、それはA子の性質によって方法を考えるべきである。

(1) A子が、つねに人を非難し、告げ口に來る子どもである場合忙しそうにして聞きのがすのも一方法だが、いつもそれではいけない。A子に、人の気持ちを察する心を育てていくようにする。

「Bちゃん ほしかったのね」と同情のことばをかけ、A子の心を動かすようにする。

(2) A子が、道徳的な判断を求める気もちが強い場合

「それは、いけないことね」といい、人を責めずに、やったことを責めるようにして、人を傷つけないことである。このような問題に対する精神的分解は、デリケートであるから、その時々に応じて判断し、考慮していかなければならない。

### (三) 社会的に生きているということ

人間が生活していく上において、個と個の関係だけでなく、社会の中の個が考えられる。幼児期にはむずかしいが、幼児期らしい形でやることができるのである。

社会の中の個を育てるための実際面として次のことがいえる。

## 1 人に迷惑をかけない

社会に在るかぎりには、社会の中の個としての役目がある。それを守らないことは人に迷惑をかけることになると同時に、自己の役目を怠ることになる。日本人は、人に迷惑をかける感じに鈍い。もしかけたら、ごめんなさいの気持ちで、社会生活を生きていかなければ民主的ではない。

## 2 礼儀を重んずる

自由の尊重から、しつけを無視することはいけない。民主主義においては、個としての発達社会の個としてのしつけを重んずる。どうやってするかという方法を考えることより、どういう根本精神であるかと考えることが大切である。

根本になることはといえば、今まで話してきたことが、いわゆるしつけの根本になるのである。

しつけの根本として考えられること

- 自他の区別をはっきりする
- 自己に責任をもつ
- ありがとうの気持ちをもつ
- 人を非難しない。
- 人に迷惑をかけない。
- 礼儀を重んずる

これらの根本精神から当然生まれてくるところのしつけを大切にする。

従来の教育は、何か他に目的があり、そのために役にたつための教育であった。

今日の教育は、人間尊重を究極とする教育であり、人間なるがゆえに、人間として教育するのは当然の摂理である。

貧乏な人も、知能の低い人も、身体の不自由な人も、人間なるがゆえに、人間になるよう教育するのである。出世が目的ではない。教育の基の基の幼児保育において、この人間教育は喜ばしい。

人間が人間になっていく喜びを、充分味わい得る人でなければ、この教育はできない。指導者の人間性にまつのみである。

以上、二十六年前の保育理論を、現代において再び考えて見た時に、その根本精神は、そのまま生きるものであることが、はっきりわかる。

しかしながら、めざましい経済成長にともなって、その社会の中にあつて、教育の果たす役割は、何であつたのであろうかと考えさせられることは多い。もし人間らしさをなくしてい

たとしたならば、ここで再び、人間に立ちかえり、自然にかえり、心を育てることに、真剣にとりくまなければならないと思う。

どういう人間に育てるか、親、教育者、社会の責任にかかっているのである。特におとなの社会が、子どもに与える影響は大きい。みんなで考え、いかに人間らしい生活を送るかということが先決問題ではないだろうか。

幼児のいきいきとしたまなざしに接し、心からの楽しい叫びを耳にする時、子どもたちへの責任をひとしお強く感じるこのごろである。

私は、子どもたちの素朴な遊びの世界を大切にし、互いのふれ合いの中で、たくましく、幼児として生きる喜びを満きつさせながら、自主性、創造性を発揮させるとともに、人の気持ちも、幼児なりに思いやれる心、感謝の心を折りにふれて、育てていきたいと願ってやまない。

『教育は指導者の人間性にまつのみである』と結んでいる、この民主社会に切り替えられた当時の、倉橋先生の『保育新論』は、今日、そのまま、私自身の生活の指針としてもいきているのである。

(江戸川区立鹿本幼稚園)

